田中隆尚撰集

第四卷

田中隆尚撰集　第四卷

平成十八年九月十五日印刷
平成十八年九月二十五日發行

著者　田中隆尚
發行者　唐澤明義
發行所　展望社
郵便番號一一二・〇〇〇二
東京都文京區小石川三・一・七
エコービル二〇二
電話　〇三(三八一四)一九九七
FAX　〇三(三八一四)三〇六三
振替〇〇一八〇・三・三九六二四八

印刷・壯光舍印刷／組版・エムツークリエイト
ISBN4-88546-156-1

隨筆一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

茂吉隨聞　上

昭和十六年……七
昭和十七年……二三
昭和十八年……八〇
昭和十九年……一五三
昭和二十年……二三七
昭和二十一年……二九〇
昭和二十二年……三〇〇
昭和二十三年……三一八
編集覺書……四九三

茂吉隨聞　上

昭和十六年

九月三十日　火曜日

第一高等學校の教室から寄宿寮に通じてゐる退時の彌生道には、小雨の降つてゐる公孫樹並木の下を歸りを急ぐ生徒の群が陸續として續いてゐた。まだ夏の霜降の制服をきて麻裏をはいた姿が主色を占めてゐたが、紺の制服に著替へて、既に秋仕度に入つた者もかなり目立つてふえてゐた。それに絣の著物をきて袴をはいた姿が時々入り交つてゐて、制服のあるこの學校に一見雜多な色が浮動してゐた。しかしこれらの亂雜な行列もながくは續かず、彌生道のはづれに立つてゐる掲示板の下を過ぎると、やがて四つの寄宿寮の入口に分れて呑まれ、長い廊下を通つて各〻の室の中に消えて行くのである。

誰かがこの寄宿寮の入口で寮歌「都の空に」を歌ひ始めた。聲はさほど大きくもないのに、廊下のコンクリイトの壁に高らかに反響して、次第に私のゐる部屋に近づいてくる。外では誰かが細い聲で「圖南の翼」を歌ひ始めた。どこか遠く離れたところで誰かがそれを勵ますやうに途中から和した。聲は澁い二重唱となり、人々の共感を誘つて天の一角にひびいた。此處明寮の中でも又人がそれに和

した。向うでも和した。聲は聲を合はせて次第に莊重な自然の合唱になつた。向ひの北寮の屋上では誰かが先程から獨りでしづかに沈鬱な寮歌を歌つてゐた。私のすぐ上の兄の作つた「新墾」であつた。北寮の向うの中寮、その向うの南寮のあたりでも歌詞のはつきりと聽き取れない歌聲が、いくつもいくつも流れてゐて、あたかも蟬時雨のやうに相交錯して起つてゐた。私は制服をぬぎ、絣の著物をきて袴をはいた。私の制服は夏冬ともに既に二代の著服で破れてゐて、肌著の襦袢がいくところにも露出してゐた。敝衣破帽はこの學校の永い傳統であつた。そして齋藤茂吉はこの學校の先輩であつた。それなのになぜか私は敝衣をきてゆくことを「赤光」の著者の前にはばかつた。私は麻裏をはいて校門を出た。

此處から青山に行くには、一高前驛から帝都線に乘り、澁谷で地下鐵淺草行に乘換へる。地下鐵は澁谷を出ると、始は高架線のやうに高い土堤の上を通り、間もなくくだつて地下に入る。そして二、三分もすると神宮前の驛にとまる。私は此處で降りて、階段を登つて地上に出た。地上には電車が通つてゐて、出口から右の方に向ふと、道路は向うの方で右にまがつてゐる。宮益坂を下つて澁谷に至るのである。左の方に向ふと、やや右に曲折し、青山三丁目を過ぎて、青山一丁目の交叉點に通じてゐる。私は左の方に歩を向けた。間もなく明治神宮の參道が左から通つてゐて、この電車通と十字をなしてゐる。それを横ぎつて行くと間もなく右側に文房具屋と蕎麥屋の間から右に折れる道がある。この小路に入るとやがて交番のところから左に折れる道があり、それを少し行くと又右に行くやや廣い道が通つてゐる。電車通から小路に入つてからは住宅街になつてゐて、門構に長い塀のある家が多い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が、この最後の左角のコンクリイトの塀の中には、柿の木の綠の大きな葉がしげつてゐて、雨空のやはらかな光を受けて微光を放つてゐる。

私はこの柿の木の下を通り過ぎて、廣い道を奥に進んだ。すると今まで急ぎ足できた足取りがいつしかゆるんでくる。行手には青山腦病院の本宅の塀が空地つづきに立つてゐる。それを見ると私の心にはおのづから、運命の道である、運命の道であるといふ囁きが起つて、たかぶる心を制しかねた。

一體私の歌は既に今年アララギ二月號の童馬山房選歌に、「眠るともうつつともなき時のまに鋭くひびく百舌の聲かも」「わが母よわが母上よ安らけく眠りたまへよわれにかまはず」の病中吟二首が出てゐる。爾來毎月投稿を續け今年三月入院中には五兄隆泰が私の歌七首を持參して直接評を乞うた。先生は若干注意した上「素質はあるがな」と云はれたさうである。しかし病癒えた今私には新な歌があつた。私はこの歌についてこの人の詞をみづから聞きたい。パルナソスの主の宣告を聞きたいのである。主はこれらの歌にラウレアの冠をかぶせて祝福の微笑を送るだらうか。この道に抱いた私の自信が必ずしも虚妄でなかつたことを證してくれるだらうか。それとも私の目に見えない缺陷に冷嚴な批判を下して、假借のない一斷で私の執心の絆をたつだらうか。私はかねて前者の場合のみを想定してゐたが、腦病院に近づいてくるにつれて、後者の豫感の方が頭をもたげて重苦しく胸にのしかかつてくる。私はあたかも屠所にひかれゆく小羊のごとくであつた。

今や最後の道である。折しも住宅の塀にはさまれた路上に靜寂が支配してゐて、人影が見えない。雨空の鈍い光に塀の向うの瓦屋根がどんより見える。私は時計を見た。時計はまだ四時にならない。

私はいつのまにか右に厚生會產院のあるところに來てゐた。左には空地があつた。空地にならんでコンクリイトの塀のある童馬山房本宅があつた。その次に赤煉瓦の青山腦病院分院があつた。私は分院の大きな角柱に支へられた車廻しの庇の下を通り、玄關の叩きに入つて、刺を通じた。

玄關脇の受附から初老の人が出てきて私を導いた。叩きから上ると直ぐ廊下が横に通つてゐて、それを右に行くと直ぐ右に控室、左に應接室があつた。私は控室に通されて待つた。誰も來てゐない。壁には油繪の額がかかつてゐる。宮坂勝の「アルプス」と「小金井の櫻」とである。それから大相撲の番組がはつてあつたが、それがなぜ此處にはつてあるのか分らなかつた。

「お待たせしました」と云つて先生が現れた。「赤光」の著者である。先生は白い診察服を著てゐられた。顱頂が禿げて、口鬚は胡麻鹽になつてゐた。背は高くて少し前屈みに、首をひよんと前に出してゐられた。丁度加藤將之の「齋藤茂吉論」の口繪の寫眞をもつと面長に鋭くした姿であつた。私が初對面の挨拶をすると先生はすぐ向ひの應接室に導かれた。

「もう身體はいいんですか」と先生は尋ねられた。親しい詞であつた。これは既に先生がアララギを通して私の歌を見てゐられたのと、四人の兄に面識があつたからであらう。先生は窓の方の左側にある肱掛椅子にかけられて、私はその向ひにかけた。

田中隆尙

○歸りこし道に麥の穗黃に照らひほそほそゆれてゐたりけるかも

○ほそほそと風吹きゐたり道の邊の麥の穗ゆりつつ風吹きゐたり

○たまきはる命死なずて麥の穗をふたたび見たり黃なる麥の穗
○癒えて歸るわれの心はいひがてぬ麥の穗みつつ歩みきにけり
○今しわれ歩みゐるなりたまきはる命生きたれば鵠沼の道に
○癒えて帰る吾を見たまはむ母が目を一目を欲りつつ歩み早めつ
　おもかげに君ゆらぎ來れば箸持てる生きの小指に力なしわれは
○食(を)す飯(いひ)ゆ湯氣(ゆげ)がかかり來ほろほろに頰に觸るれば悲しかりけり
○心しづまり眠りゐたれどもをさな子の聲けたたまし悲しそのこゑ
　青く澄む川にきたりて君ゆゑに歎きたるなれ夏草の上に
　歎かひて川邊に來つれ水泡はもまなかひ過ぐるいまし消ぬがに

私は直ぐ歌を出した。先生は赤鉛筆を取つて讀みながら第六首にきて「いい歌だ」と云はれた。「おもかげに」の歌では「「ゆらぎ來れば」といふのはどういふのだ、schweben(シュエエベン)か」と云つて微笑み、「いいだらう」と附加へられた。次の歌では「食す飯」と「湯氣」とに假名をふられた。そして全體を見終つて、「面白い」と感に堪へたやうな面持で云はれた。

「歌はいい。みないい。」

「學校の雜誌に出さうと思ひますが、選んでいただけませんか」と私は云つた。

「どれでもいいがな、「君」といふのは君、戀人か。今はかういふのは學校の雜誌には向かないからねえ」と先生は云つて、「君」のない歌八首に丸をつけられた。「これから一月に十首作つて、月に一

度くらゐ持つてきたまへ。歌は十年くらゐやらなくては駄目だからねえ。」

私はこれらの詞を當然のやうに聞いてゐたが、十年もやらなくては駄目だといふのが腑に落ちなかつた。しかしそこまでつつこんで尋ねることはまだ出來ない。私は歌稿を風呂敷の中にしまつた。そして用意してきた色紙を二枚出して云つた。「先生の歌を書いていただけませんか。」先生に稱嗟せられた今は當然字も書いてもらへることと思つてゐた。

「字は書かない。書かないことにしてるんです。」先生は意外にもかう云はれた。そして「身體はもういいのかな」とふたたび聞かれた。

「ええ、もう大丈夫です」と私は直ぐに答へたが、先生は「さうかい」と納得出來ないやうに云はれた。

「どれ先生がひとつ診てあげよう。こつちへ來たまへ。」

先生は先に立つて應接室を出て、薄暗い廊下を左に行かれた。直ぐ應接室に接して診察室があつた。中には種々の醫療器具の外に吳秀三の肖像がかかつてゐた。平井文雄の筆である。

其處で私は大體の病歷を話した。昭和十二年三月第一高等學校入學試驗體格檢査の際に左肺尖にラツセルが聞え陰影が見えるとのことで不合格。昭和十三年三月同校入學試驗の際にも、同じ理由で不合格。昭和十四年三月同校入學試驗の際には快癒してゐるとのことで文科乙類に合格。ついで昭和十五年三月心囊炎となり休學、七月恢復、八月再發、この時はひどくて心筋炎と診斷した人もあつた。本年昭和十六年に入り四月にマツサアジをして不治とも云はれた病が頓に快方に向ひ、五月にほぼ全快、七月には一度先生の留守中に腦病院を訪れ、九月六日から二學年に復學し同時に歸寮した云々で

ある。それから私は肌を脱いで、以前一番大きかつた時の心臓の位置を云つた。胸骨より四、五分右側のところである。

「さうかい」と云つて先生は直ぐに打診をして心臓の大きさをはかられた。そして「今は小さくなつてゐる。左がまだちよつと大きいがな」と云つて、左に出てゐるところに指をあてがはれた。

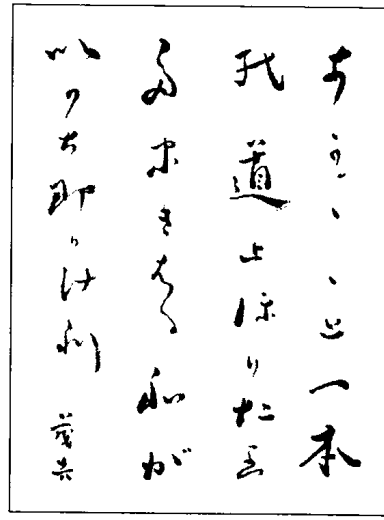
それから先生は聽診器で胸をみ、ついで背中に移られた。背中を診る時に「深呼吸してくれたまへ」とか、又「ひとおつ、ひとおつと云つてくれたまへ」とか云はれた。そして低い大きな聲でいふその音の響を丹念に聽いてから最後に背中を打診せられた。

「胸は心配ないな」と診察を終へて云はれた。「心臓も大體よくなつてゐる。しかし無理をしちやいけない。」

それから先生は學校のことを聞かれた。學校は一學期を出てゐないのに、これからでも及第出來るかどうかといふことである。これは私自身氣がかりで、生徒主事に尋ねて、二學期三學期の平均點が七十點以上あれば大抵大丈夫だといふことを確めてゐた。そこで先生にその旨告げると、先生は始めて得心せられたやうであつた。

診察がすむと二人は診察室を出た。そこで私は今日はこれで歸らなくてはなるまいと思つてゐると、突然「さうだねえ、書いてあげようか」と云はれた。そして「其處で待つてゐたまへ」と云ひ殘して、持參した絹の色紙を二枚どこかへ持つて行かれた。

私はふたたび應接室に入つて待つた。應接室には先刻かけた桃色の肱掛椅子のほかに小椅子がいく



つもあつた。それから楕圓の卓子があつた。薄綠の壁には左側に桃の實を描いた油繪の額がかかつてゐた。正面には海岸の風景畫がかかつてゐた。海岸は單調であつたが、紺碧の海の色とそれから砂濱の代赭の色との對照がめだつてゐた。いづれも鈴木信太郎の繪であつた。

間もなく先生が入つて來られた。

無地の絹の色紙にかう四行にわたつて變體假名を交へた行書で書いてあつた。歌は前以て私が所望したものである。それを手に取つて、まだよく乾かない墨の跡を見てゐると、「字はよく書けない」と云はれた。又「一枚はもらつてもいいだらう」と云はれた。これは色紙は一枚餘分に持つて行つて先生に差上げるのが禮儀だといふことを前以て聞いて用意してゐたものである。

先生はそれから「さあ失敬しよう」と云はれた。そして玄關まで送つてきてはからずも私の麻裏を見られた。

「あはは、麻裏をはいてゐるのか、面白いねえ君。」

私は失笑されたやうでもあり、又輕く難詰されたやうでもある。私は默した。

玄關を出ると外は黃昏である。寄宿寮では既に學友は夕飯をすまして、一日の中の第二次の寮歌の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com